ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.17 No.12 December 2016

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

CONTENTS

- 巻頭言
  「三笠宮さま薨去」の報に思う
  ／高見宇造 1
- 天理教教理史断章（111）
  勢山文書②「おさしづ」の写し翻刻
  ／安井幹夫 2
- 『教祖伝』探究（30）
  閑話：根を掘る態勢づくり
  ／深谷忠一 3
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～（32）
  第４章　南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」⑦
  ／井上昭夫 4
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（18）
  「み」について⑤
  ／佐藤孝則 5
- 「おふでさき」の標石的用法（16）
  動詞について①
  ／深谷耕治 6
- 新宗教のブラジル伝道（44）
  救済の多様性　PL 教団③
  ／山田政信 7
- 伝道と翻訳　―受容と変容の“はざま”で―（2）
  翻訳とは①
  ／成田道広 8
- 地域福祉を拓く　―新たな寄付文化の創造―（24）
  ファンドレイジングとは何か
  ／渡辺一城 9
- 遺跡からのメッセージ（18）
  イスラエルの遺跡調査④　ミグダルの初期シナゴーグと七枝の燭台
  ／桑原久男 10
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（9）
  探検家ピエール・サヴォルニャン・ド・ブラザ
  ／森　洋明 11
- ヴァチカン便り（23）
  エキュミニズムに向かって
  ／山口英雄 12
- 平成 28 年度公開教学講座要旨：現代の事情に対する天理教の思案（2）
  性的少数者とジェンダー―いちれつきょうだいを考える―
  ／堀内みどり 13
- English Summary 14
- おやさと研究所ニュース 15
  「教学と現代」のご案内／宗教倫理学会第 17 回学術大会に参加（堀内みどり）／『グローカル天理』合本のご案内／平成 28 年度「公開教学講座」のご案内

巻頭言

「三笠宮さま薨去」の報に思う

おやさと研究所長　高見宇造　*Uzo Takami*

10 月 27 日、三笠宮崇仁親王殿下が薨去されました。深い悲しみに堪えませんが、謹んで哀悼の意を捧げたいと存じます。三笠宮さまは、お忙しいご公務のかたわら、戦後は東京大学文学部の研究生となり、歴史学者の道を歩まれ皇室の国際親善に大きな足跡を残されました。

その訃報は直ちに新聞各紙が伝えましたが、中でも『産経新聞』は「オリエントの宮さま 教壇に」（10 月 27 日付夕刊）として「古代オリエント宗教史」を天理大学生に講じておられるお写真を掲載しました。また翌 28 日付朝刊には「三笠宮さま 飾らぬ人柄」として新装した天理参考館で展示物をご覧になられるお写真を載せました。私はあらためて宮さまと天理の深いご縁を思いました。

宮さまは昭和 35 年から平成 2 年まで天理大学の非常勤講師としてお務め下さいましたが、そのご縁は中山正善 2 代真柱様とのご親交によるものだと思います。それはご自身が、『みちのとも』(昭和 43 年 2 月号) に「前真柱 中山正善氏の思い出」として寄せておられることからも拝察されます。

「中山正善氏は東大宗教学会の大先輩であり、日本宗教学会の重要メンバーでもあったから、いろいろ会合でお会いするようになった。昭和 26 年には日本宗教学会の第 11 回学術大会が天理大学で開催され、わたくしも参加した。これがわたくしが天理大学ともご縁ができた最初ではなかったろうか。ずっと後になってから、わたくしは同大学の講師を依嘱され、隔年に古代オリエント宗教史の集中講義を受け持つことになったが、その際、大先輩中山前真柱まで学生たちのうしろで聴講されるのには恐縮した」と誌しておられます。私も天理教校本科生時に同講義を受講しましたが、最後に「よく聞いてくれて有り難う」と仰られたことが今でも心に残っています。

また創立された日本オリエント学会についても「同会でイスラエル共和国に派遣したテル・ゼロール遺跡発掘調査団の財政的裏づけは、まさに中山正善氏なればこそ、また天理教前真柱なればこそ可能であったと思われる。……前真柱をはじめとし、天理教団のたくさんの方々が日本オリエント学会に与えられた恩恵の数々は枚挙にいとまあらずで、会長としてわたくしの永久に忘れられないところである」と誌しておられます。こうしたご縁から私たちも多くのことを学ぶことができたのだと感謝を申し上げます。

今回、私はあらためて宮さまの数多いご著作の中から『古代オリエント史と私』(学生社、昭和 59 年) を読み返しましたが、皇族のお立場で歴史学者の道を歩まれた思いを誌しておられるくだりが心にとまりました。「皇族である以上は、学者としての仕事以上に適当なものがあるのではなかろうか。……学者とは一種の社会逃避ではないか」という不安が絶えずあられたのです。

しかし、折しもマーテルリンクの『霊智と運命』（栗原元吉訳）を読まれ、多くを学ぶことができたとして同書から次の引用を施しておられます。それは「現に我々の周囲にある善事中の善事というものは、おそらく《さしせまった多くの義務を抛擲して思索すること》、すなわち《自分自身と交通すること》や、あるいは《自分自身と相語る》ことに専心になった人々が考案したものだからである。……何の時代にも未来の義務を考えることが刻々の義務を果たすことであるということを、忠実に信じた人が幾人かはかならずあった」というものです。あらためて宮さまのご思慮の程を偲ばせていただくことができました。